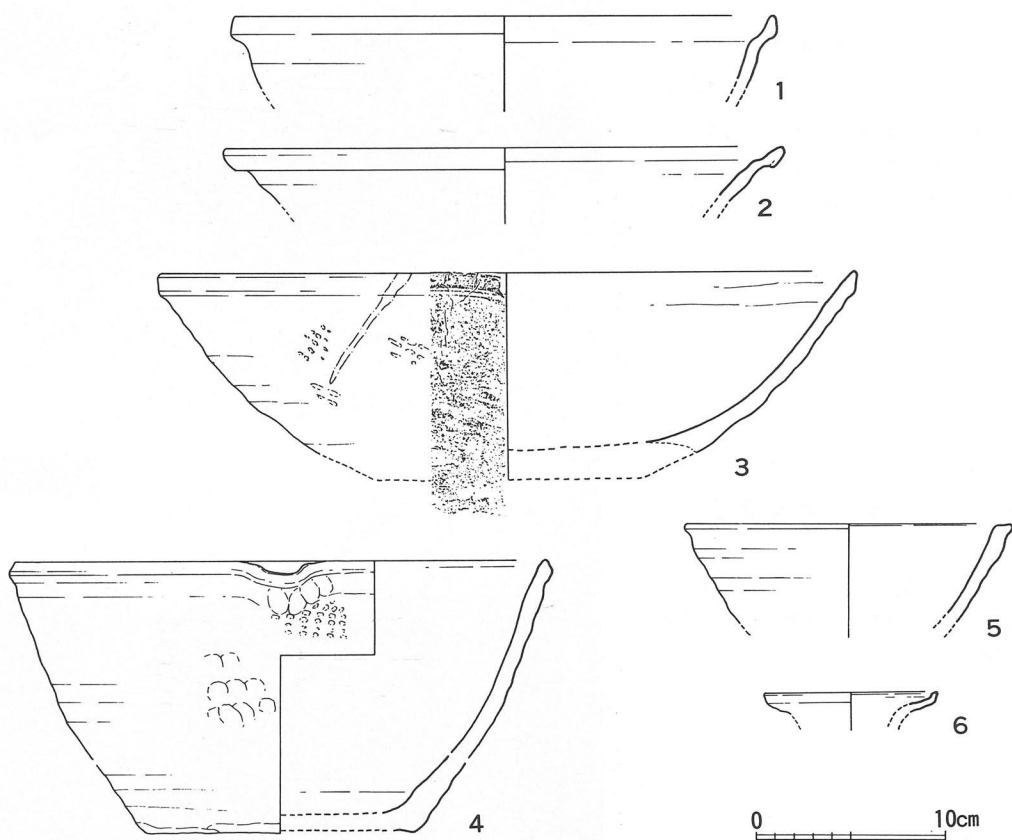
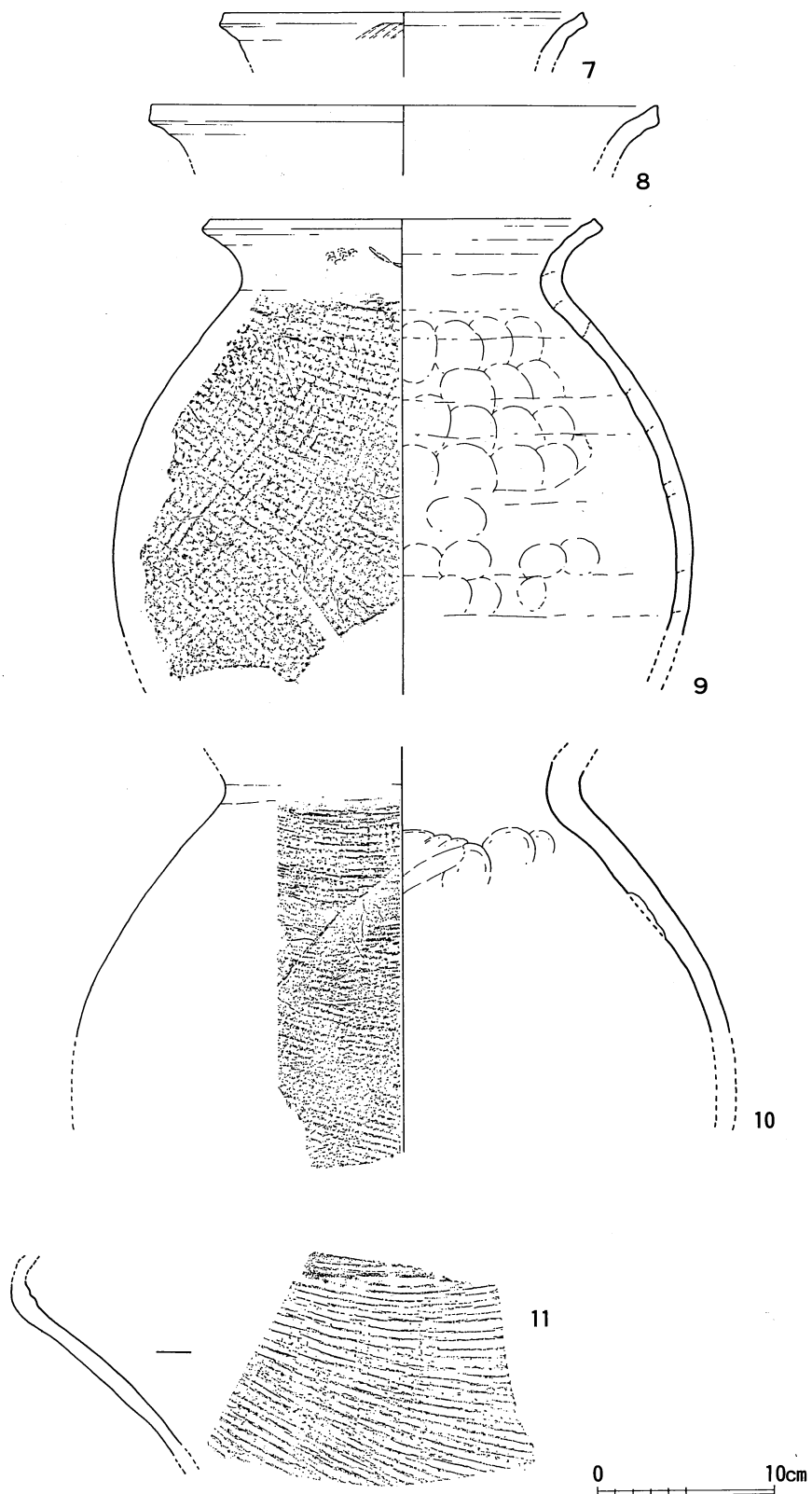


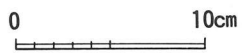
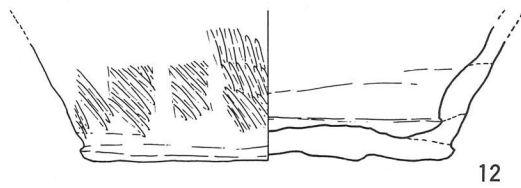
写真68 窯体断ち割り状況 (b-b'断面)



第28図 窯体内出土須恵器(1)鉢・壺



第29圖 窯体内出土須恵器(2)甕(口縁・体部)



第30図 窯体内出土須恵器(3)甕(底部)



写真69 作業風景  
窯体内に堆積した土を除去しているところである

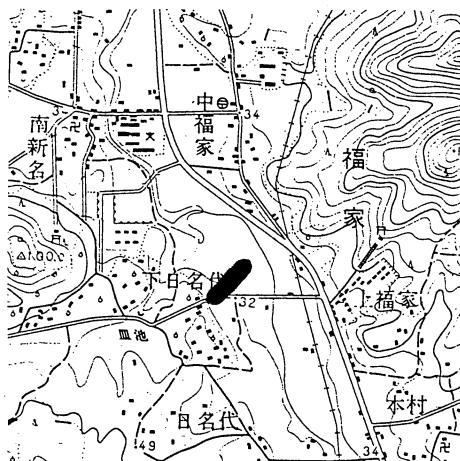
## 10. 国分寺・下日名代遺跡

国分寺町は四方を山に囲まれ盆地状の様相を呈する地である。その縁辺部には古墳や国分寺跡が点在するが、平地部はこれまでほとんど調査されたことがなかった。高松平野から本津川沿いにのびてきた条里制の推定範囲も南部にまでは及んでおらず、いわば実体不明と言った感があつた。このような現状の中、今回四国横断自動車道建設のために平地部で東西200m、南北80mの大トレンチが入られることになった。

調査地は、国分寺町中央を南から東に流れる本津川の左岸段丘上に立地する。起伏はほとんどないが、微妙な土地の出入りが見られる。中央付近には北から微高地が伸びており、こういう地形の場合、そこに集落が営まれることが多く、住居跡の検出が期待されたが、近年の粘土採掘のため確認できなかった。その東側では南北に窪地が走るが、弥生時代にこの窪地に向かって数条の細い溝が掘られていた。まばらで方向が不規則なため性格は不明であるが、何らかの排水用にでも使われたのであろう。この遺構面と現在の水田面との間に堆積した包含層にもほとんど土器が含まれておらず、付近への人々の出入りはあまりなかったと考えられる。

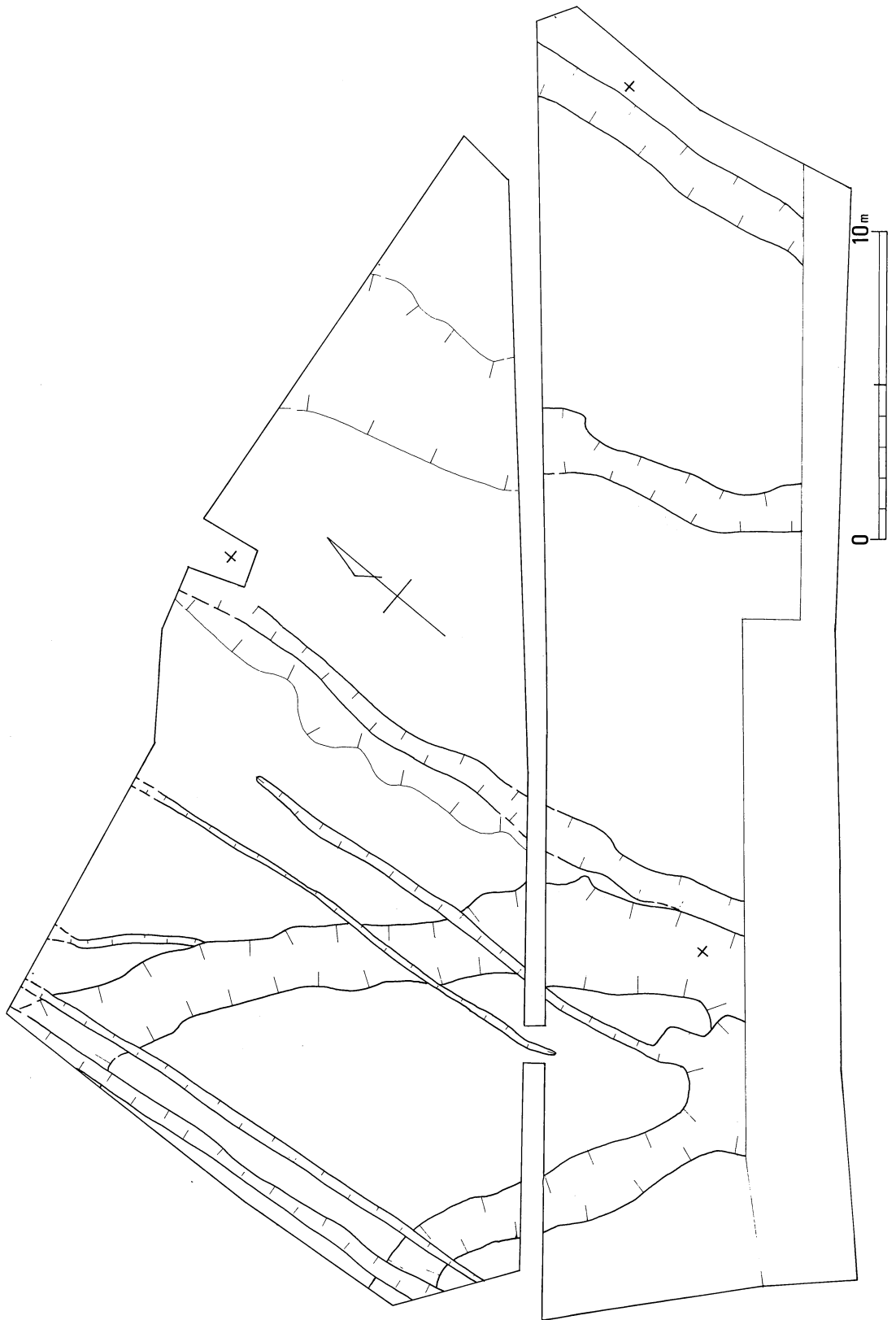
一方、調査区西部は中央微高地の縁に沿って南から北に幅約20mの自然河川が流れていた。弥生時代後期頃には埋没してしまったが、この後もしばらくは窪地となって残っていたらしい。川跡の上には周囲から掘削してきた土を埋めて整地したことが土層断面から読み取れ、また多数の動物の足跡が確認されたため、何らかの土地利用がなされたと考えられる。出土した土器より古墳～平安時代の頃と知られる。川跡に接する調査区西南隅には、古墳時代後期～奈良、平安時代後半の溝が掘られていた。川跡の土地利用に関わるものと見られる。

以上が遺構の概要であるが、総じて遺構の数は少ない。特に、建築物関係の遺構はピットを数個検出したほかは、皆無であった。一方、出土遺物の大半は包含層中よりの出土であり、上述したように東で薄く西で密となっている。これらのことから、遺跡西方に集落が営まれていた可能性が出てくる。その候補地には、遺跡西端を限り南から北に張り出す舌状丘陵上が挙げられよう。本遺跡はその縁辺部に当たる。また包含層中には中・近世の土器がほとんど含まれないことから、この時期には土地利用がなされてなかったと考えられる。弥生時代に付近に最初の集落を構えて以来、低地に向かって僅かずつではあるがなされてきた土地の開発は、中世にいたって何らかの理由により一旦放棄され、近世以降何れの時期かに再び水田等に利用され始めたのであろう。



第31図 遺跡周辺地形図





第 32 図 遺構平面図 (1 区)

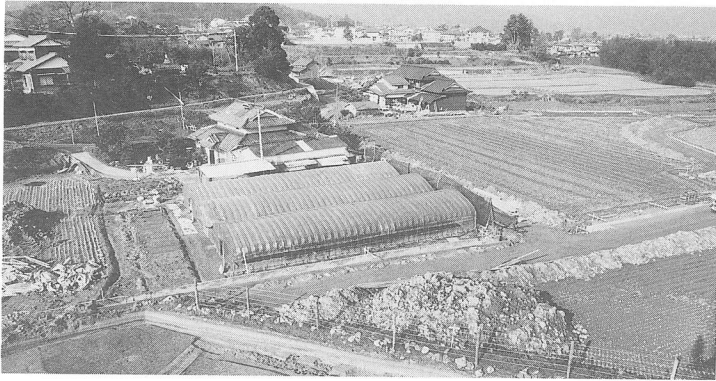


写真 70  
調査区より  
北西を望む

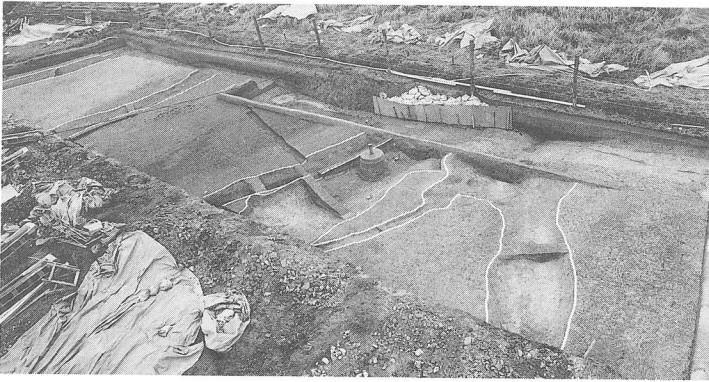


写真 71  
1区1全景



写真 72  
1区SD04  
土器出土状況

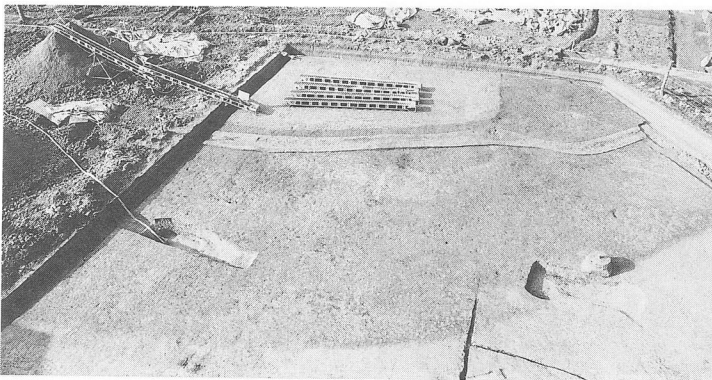


写真 73 旧河道



写真 74  
動物の足跡検出  
状況 (1)

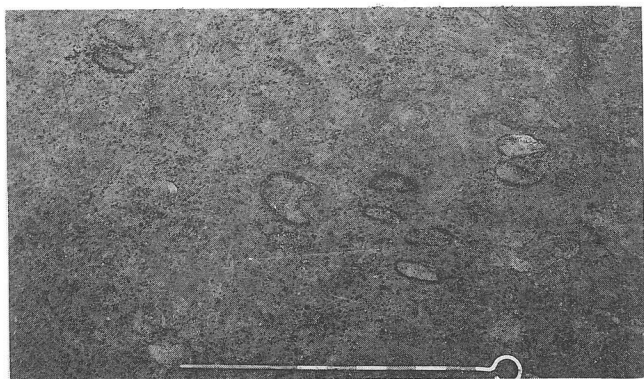


写真 75  
動物の足跡検出  
状況 (2)



第 33 図  
動物の足跡検出状況  
(1区II)

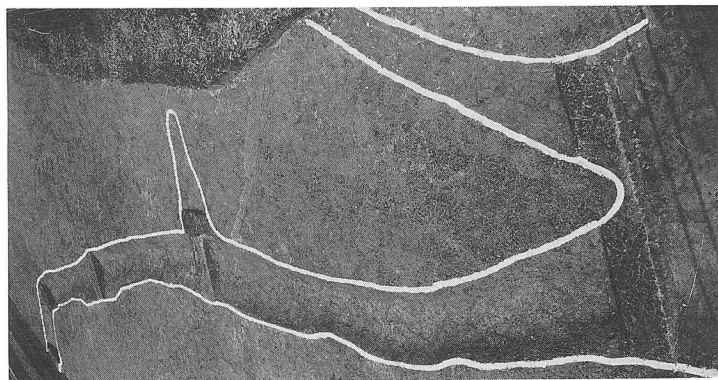
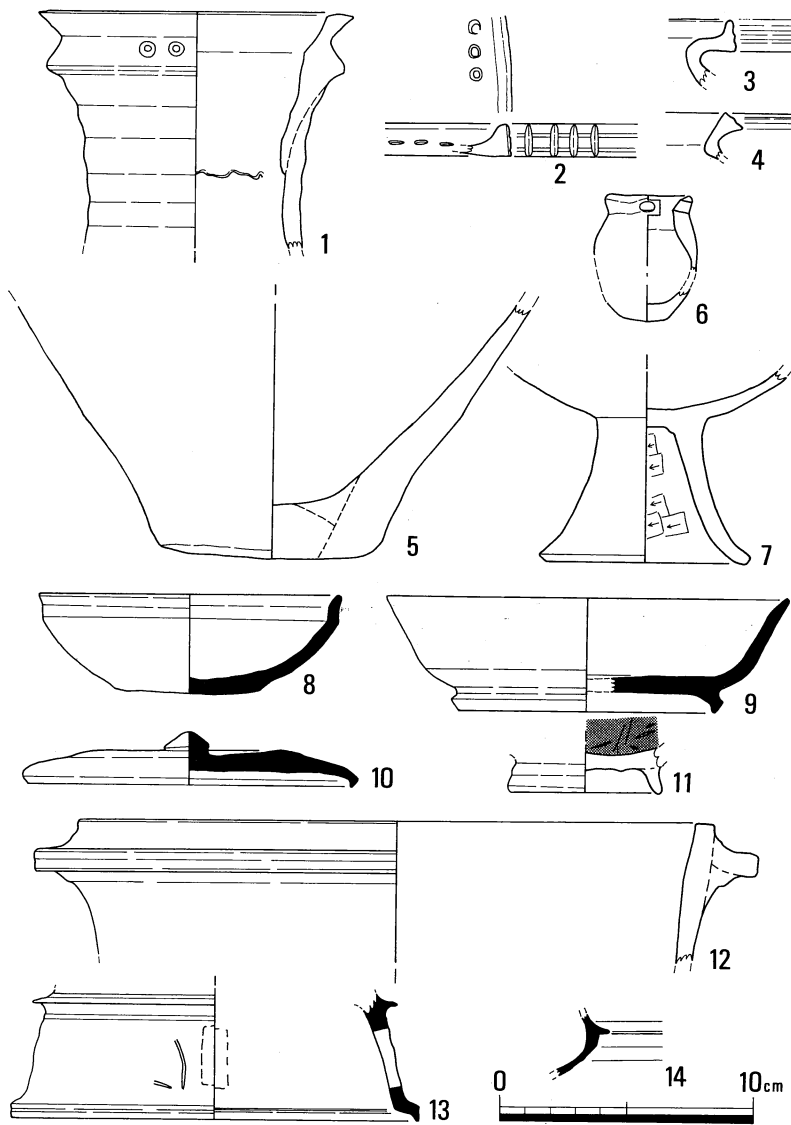


写真 76  
3区ⅣSD01



第 34 図 遺物実測図

No.	種別・器種	出土地区	出土遺構・層位	法 量 (cm)	特 徴
1	弥生土器 壺	2区I	弥生時代の包含層	口径 12.4	内面に粗い接合痕が見える
2	弥生土器 壺	1区I	SD04		
3	弥生土器 甕	1区I	SD04		
4	弥生土器 甕	3区V	弥生時代の包含層		
5	弥生土器 壺	1区I	SD04	底径 7.7	底面に板の木口痕を残す
6	弥生土器 手捏	1区I	SD04	口径 4.4	穿孔は一方よりなされる
7	弥生土器 高坏	1区I	SD04	高台径 8.4	坏部内面中央に指頭痕を残す
8	須恵器 坏身	1区I	SD05下層	口径 11.9, 器高 3.9	天井部外面ヘラ切り後ナラシ
9	須恵器 坏蓋	1区I	SD05上層	口径 16.0, 器高 4.5	底部ヘラ切り後高台を貼付
10	須恵器 坏蓋	2区I	SD02	口径 13.3, 器高 2.1	天井部外面ナデ
11	黒色土器 埴	1区I	SD01	高台径 6.2	椀内面に板の木口痕を残す
12	土師器 土釜	2区I	SD02	鑄径 26.8~30.6	撰津型
13	須恵器 硯	3区III	古墳~奈良の包含層	脚径 16.2	透かし穴の数不明。ヘラ記号?
14	須恵器 坏身	3区III	古墳~奈良の包含層		受け部直下まで回転ヘラ削り

第 3 表 遺物一覧表



写真77  
石鏃 (やじり)



写真78 石庖丁

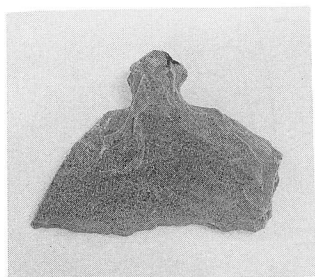
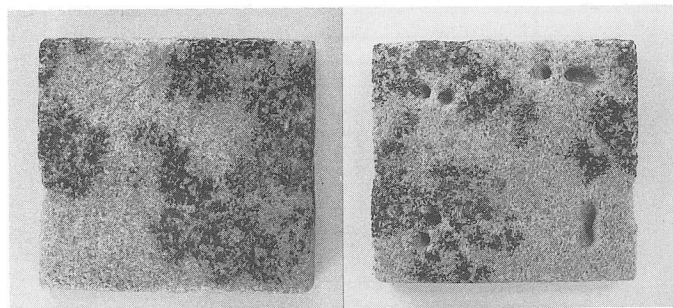


写真79 石匙



写真80 打製石斧



左写真81 石帯 (表)

右写真82 石帯 (裏)

## 11. 国分寺六ツ目古墳

国分寺六ツ目古墳は、堂山山塊より派生する標高90mの尾根の頂部に位置する前方後円墳である。二股に別れる尾根のそれぞれを前方部・後円部に利用し、前方部は六ツ目山・伽藍山の間に見える石清尾山・瀬戸内海を望み、後円部からは国分寺平野を一望できる。

墳丘の推定規模は、全長20.7m、後円部径11.7m、前方部長9.0m、くびれ部幅5.0m、前方部前端幅7.5m、主軸方位はN-47°-Eを測る。墳丘は前方部を地山整形、後円部を墳頂部付近に盛土・版築し、それ以下を地山整形によって築造している。前方部に土坑

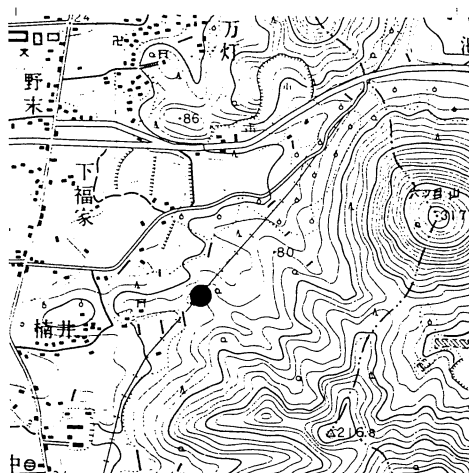
を掘り込み、山側平坦面との間に掘割を入れ、墳裾部には列石を巡らせており、墳丘の区画を意識したものと思われる。列石は墳裾を挟み、内側と外側に花崗岩の立石を配して裏込め土で固定し、その間を小角礫混じりの土で埋め、上面を平たい敷石で葺いたものと思われ、山側は掘割を半分埋めている。後円部南裾・前方部前端東裾・前方部西裾の3点より壺・鉢などの古式土師器片が出土した。

埋葬施設は、後円部に3基存在する。第1主体は、竪穴式石室に割竹形木棺を埋葬したものである。墓壙は全長4.82m(推定5.20m)、幅3.0m、石室は全長(小口前端間)3.2m、幅(基底側石間)0.51m、高さ0.30m、木棺は全長2.93m、幅0.40m、主軸方位はN-63°-Wを測る。墓壙を掘削し、棺底部に置き土をした後、床面には赤色粘土を敷いている。副葬品として、棺外床面より鉄刀・鉄剣・鉄斧・鉞、棺内より浮いた状態で鉄鏃がそれぞれ1点ずつ、計5点出土した。また西側の小口石の下からは、独立した土器埋納坑を持つ完形の広口壺1点出土した。棺内の鉄鏃を除き、壺及び棺外床面のすべての副葬品は、1cm程の赤色粘土によって被覆されていた。

基底石を欠く部分が存在すること、上部を盗掘されているものの蓋石を検出しなかったこと、盗掘坑埋土に赤色粘土ブロックが目立ち、石組みの各段階に薄く赤色粘土を敷き詰めている状況が観察されることから、石室構造は不十分なもので、粘土槨の手法を併用した可能性も考えられる。

第2主体は粘土槨に割竹形木棺を埋葬したものである。墓壙は全長3.8m、幅1.3m、木棺は全長1.8m、幅0.38mを測る。副葬品は存在しない。粘土被覆は木棺の身と蓋が合うと思われる部位のみ認められ、第1主体同様不十分な構造の粘土槨と考えられる。

第3主体は、礫槨に箱式石棺を埋葬し、上部を赤色粘土によって被覆したものである。石棺内法は長さ0.56m、幅0.19mを測る。礫槨の石材は花崗岩、石棺及び蓋石の石材には安山岩を用い



第35図 遺跡周辺地形図

ている。墓壙を掘り込み、箱式石棺を配し、小角礫を敷石状に裏込めし、蓋石を取り巻くように大型の角礫を配している。規模から見て嬰兒を埋葬したものと考えられるが、非常に丁寧な作りである。副葬品は存在しなかった。

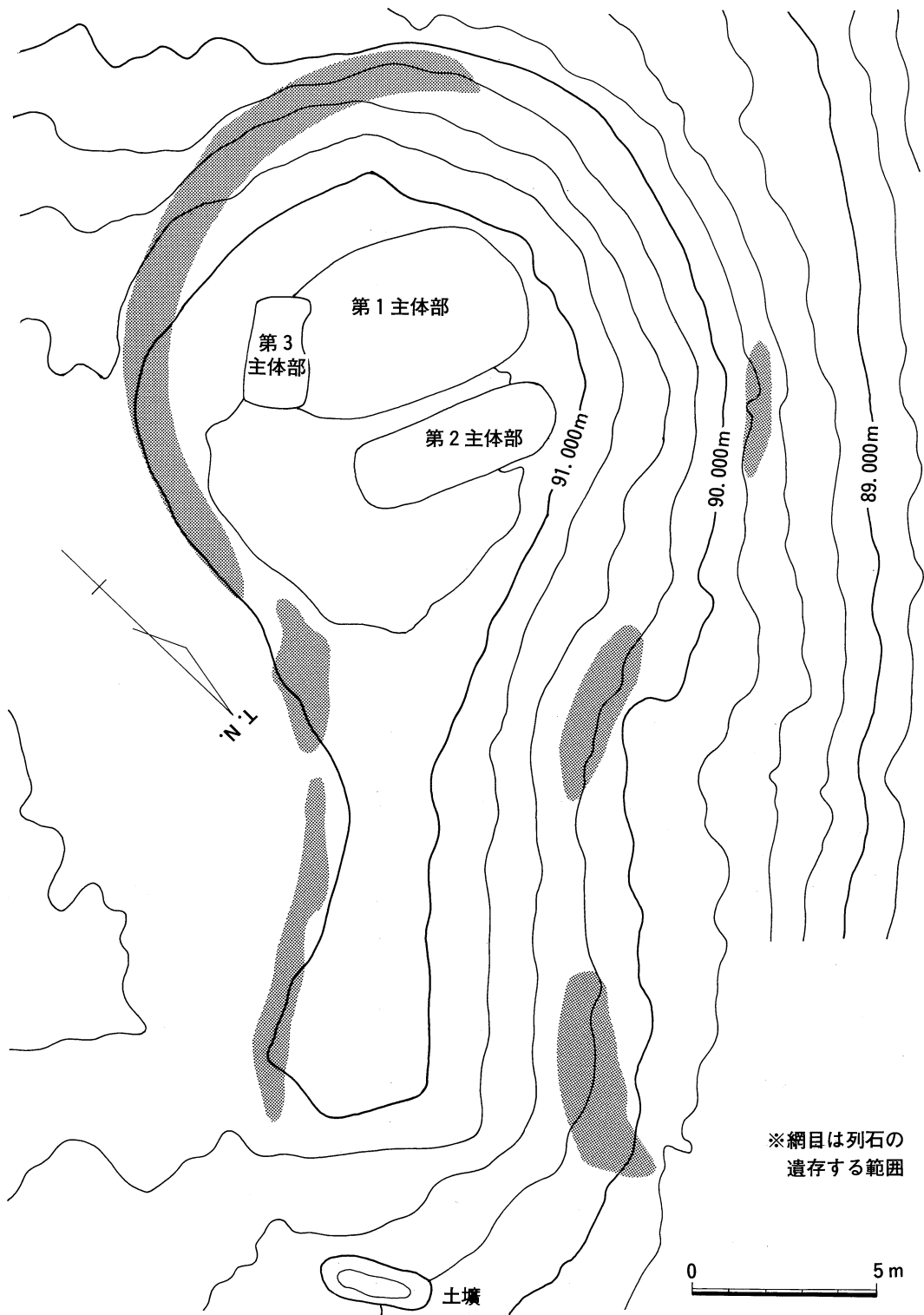
最終盛土前に掘り込まれた第1主体が最も古く、次に盛土上からそれに並行に掘り込まれる第2主体が、そして最後に第1主体を一部切って、第1・第2主体に斜行する形で掘り込まれた第3主体が埋葬されたものとする。出土した土器から、本古墳の築造時期は、古墳時代前期と考えられる。墳丘の形状も後円部よりやや低くバチ状を呈した前方部を有し、土器から見た築造時期と矛盾しないと思われる。

西側の平野側は急傾斜をなしており、風雨による侵食によって列石及び墳丘土の遺存は良好でなく、墳丘プランを確定しづらいが、明確な築造プランに基づいて構築されている可能性がある。従来前方後円墳欠落地域と見られていた国分寺平野に小型ながらも定型化した古墳が築造されていたことが判明し、古墳時代前期の讃岐の権力構造を考えるに重要な位置を占める古墳と言えよう。



写真 83 空中写真より





第36図 墳丘測量図



写真 84 古墳遠景

北面方向より古墳の側面を望む。背後の山は堂山（最高所標高304m）



写真 85 墳丘全景  
(側面)

背後に国分寺平野、五色台山塊を望む。

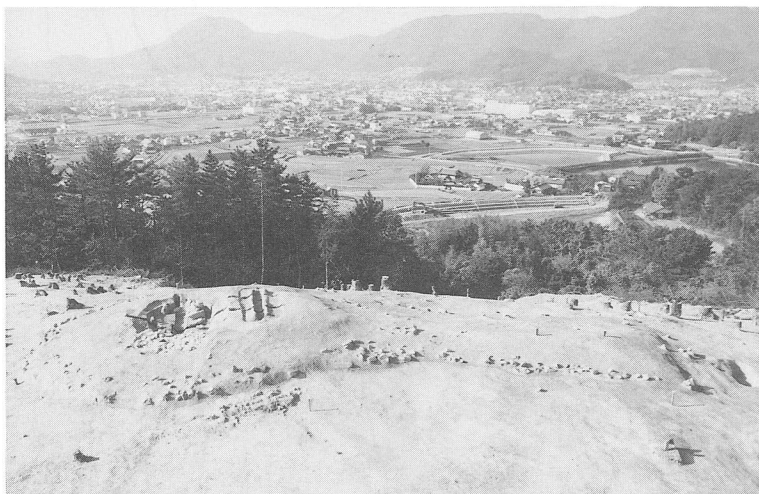


写真 86 墳丘全景  
(前方部より)

前方部側から墳丘を望む。右方向への傾斜地に作られており、墳丘の基底ラインが右に傾いている。  
前方部前端幅：7.5m  
くびれ部：5.0m

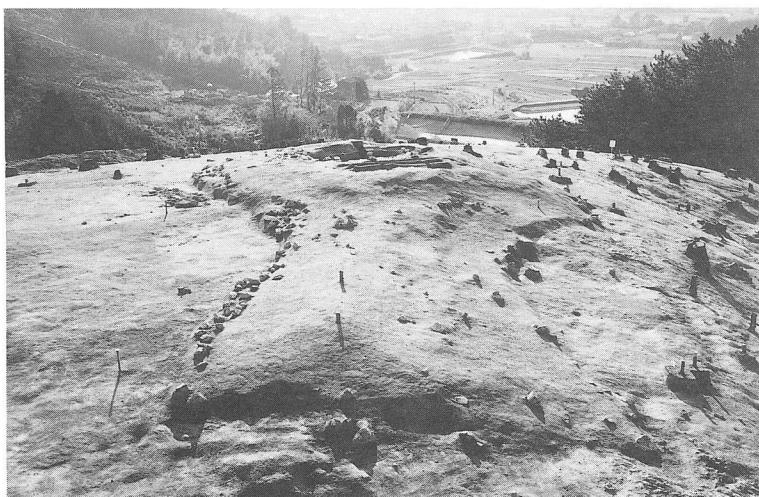




写真 87 墳裾列石  
(東より)

左下：くびれ部

右上：前方部

20～30cm大の花崗岩角礫が  
墳裾に巡る。



写真 88 墳裾列石  
(くびれ部)

後円部墳頂よりくびれ部東  
側を見る。くびれ部には他  
の部分より多くの石を配し  
ている。



写真 89 墳裾列石  
(後円部)

後円部には2段の立石が見  
られる。写真は後円部両端  
の1段目の立石である。

写真 90 主体部全景  
(東より)

後円部墳頂に3基の主体部  
が検出された。

右：第2主体  
中央：第1主体  
左：第3主体



写真 91 第1主体  
(北より)

不十分な石組の竪穴式石室  
の中に割竹形木棺の痕跡が  
見られる。石室の主軸は県  
内諸例同様、東西に近い方  
向を持つ。

石室全長：3.2m

木棺全長：2.93m



写真 92 第1主体  
副葬品出土状況  
(南より)

副葬品は石室の主に西側で  
出土した。

左：鉄刀

右上：鉄剣・鉄斧・鉈  
(以上棺外)

右下：鉄鏃 (以上棺内)





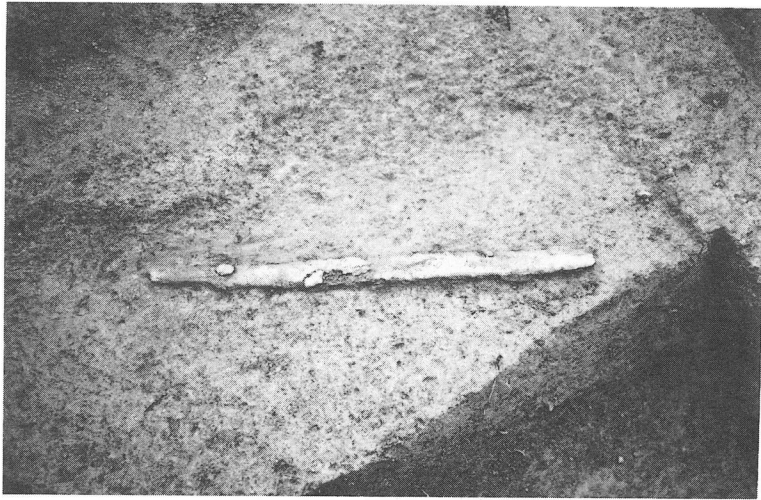


写真 93 第 1 主体  
鉄刀出土状態  
(東より)  
右側が崎・長さ39.0cm



写真 94 第 1 主体  
鉄器出土状態  
(南より)  
上段左：鉄剣  
(長さ：33.8cm)  
上段右：鉄斧(長さ：7.8cm)  
鉈(長さ：7.2cm)  
下段：鉄鎌(長さ：7.2cm)



写真 95 第 1 主体  
土器出土状況  
(東より)  
石室石組下の土器埋納壇より  
広口壺1個体が出土した



写真 96 第 2 主体 (東より)  
粘土槨木棺全長 1.8m



写真 97 第 3 主体 蓋石検出状況  
(北東より)

礫槨に箱式石棺を配置する。  
蓋石は赤色粘土で覆われていた。

蓋石長さ：98cm  
礫槨部全長：205cm

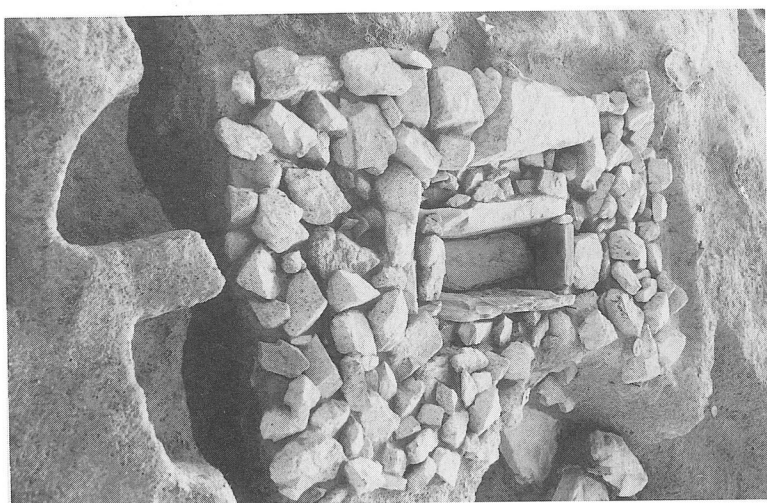


写真 98 第 3 主体 (北東より)  
箱式石棺 棺内法長：56cm  
棺材：安山岩  
礫：花崗岩



写真 99 後円部墳丘  
断ち割り状況  
(東より)

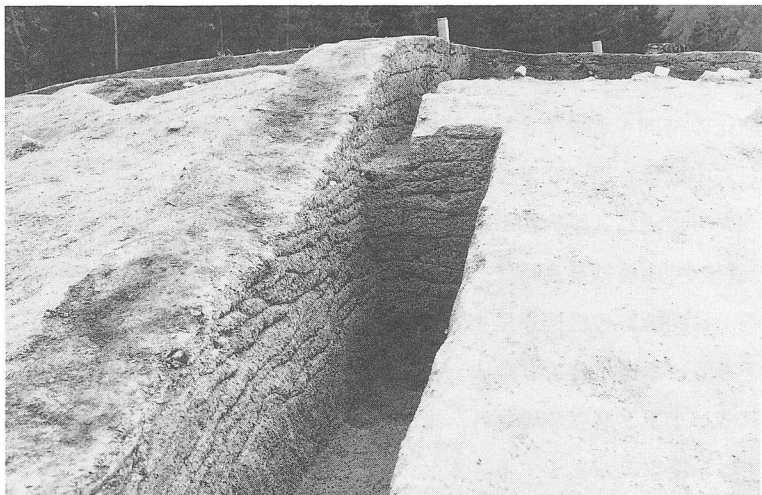


写真 100  
墳丘断ち割りトレンチ  
断面 (西より)

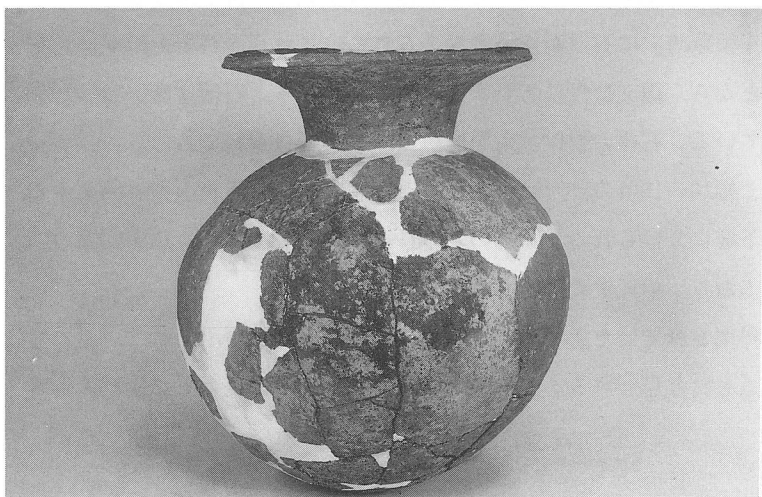
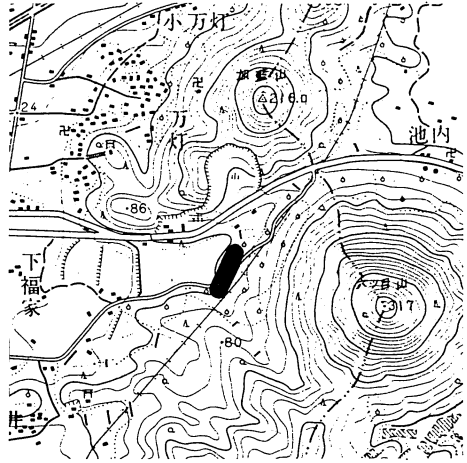


写真 101  
第 1 主体出土土器

## 12. 国分寺六ツ目遺跡

本遺跡は国分寺平野の東方、六ツ目山と堂山山塊から北東方向に延びる丘陵との間に挟まれたV字谷が、六ツ目山と北側の伽藍山との間に形成された扇状地の扇中央部側縁に開ける標高42~48mの地点に位置する。

1区から2区北側にかけては比高差2.2mのかなり急峻に下降する傾斜面である。調査前は水田として利用されており、削平が著しい。包含層の残りは悪いが、一部厚さ40cm程残っている所では上下2層に分層でき、上層は中近世土器を出土し、下層は石器類のみを出土する。SD01~03は包含層下層を切り込んで掘削される溝で、SD02からは中近世土器を少量出土した。不明遺構SX01も中近世土器を有しており、SD05はSX01を切り、SD06に切られており傾斜に直行する方向の溝は、中近世以降に所属する可能性が高い。斜面地の耕地化の時期を示唆するものとして興味深い。掘立柱建物SB01も絡まりの悪い灰色系の埋土を有し、中近世を遡ることはないと思われる。



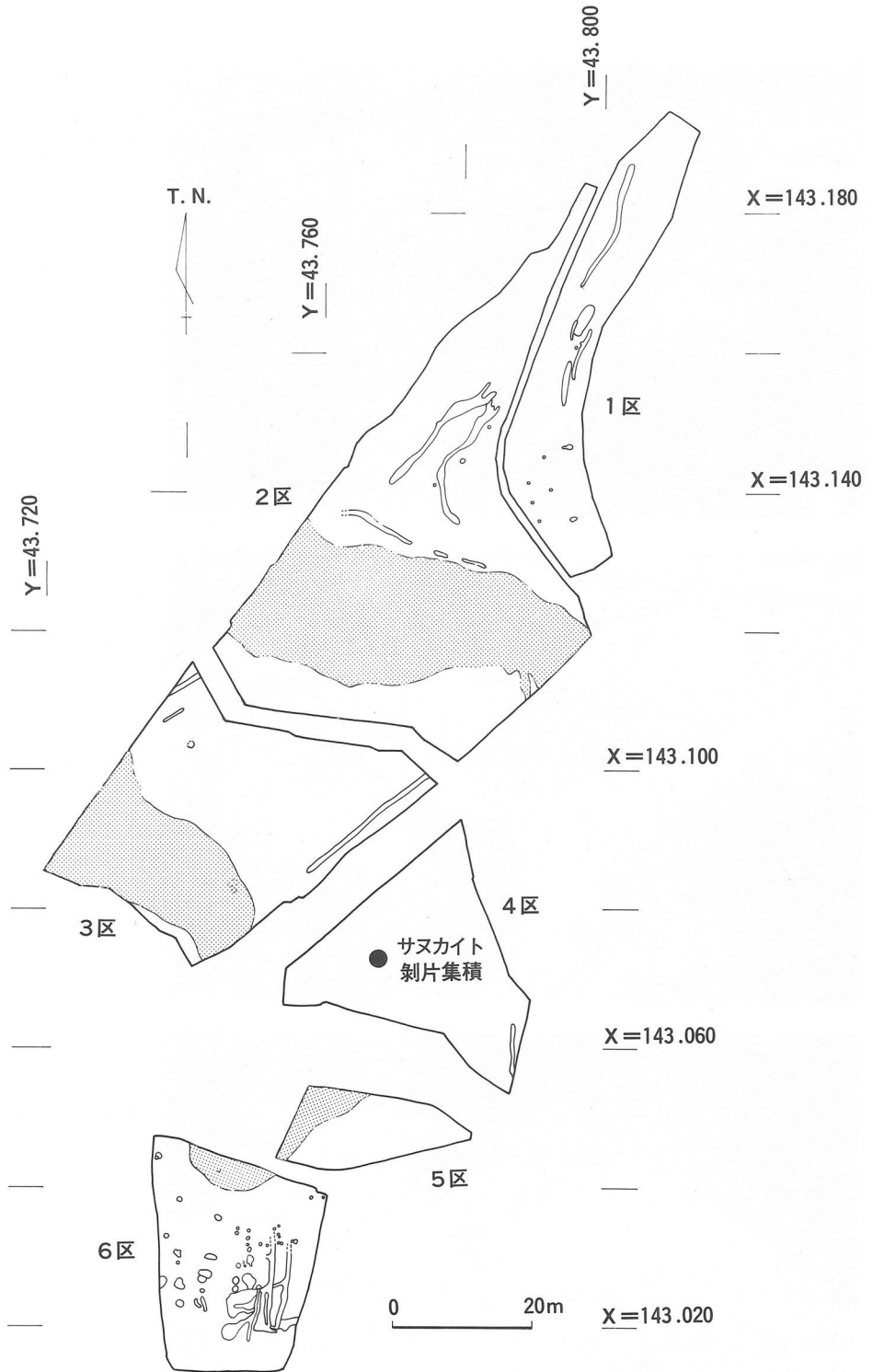
第37図 遺跡周辺地形図

2区の南側には東から西に向かって流れる幅約20mの自然河川SR01が存在する。埋土は3層に大別され、下層は弥生時代後期後半、中層は奈良時代、上層は中近世である。河幅は東端で10m程とかなり狭く、調査区の東側では開析谷の様相を呈する流路であったと思われる。

3・4区は緩傾斜の丘陵部である。水田化により地山が階段状に削平されているが、盛土がなされる部分は包含層が認められる。上下2層に分層され、上層では多量の石器と弥生時代中期前半の土器が少量出土し、下層では石器のみが出土する。4区の純粋な石器包含層では石器はいくつかの集中箇所を形成しながら分布している。そのうち60点程の大型剥片が折り重なるように1箇所集中する「サヌカイト集積遺構」は石器製作跡と考えられる。これらの石器の時期は、石鏃や石匙等が出土していることから、縄文時代に所属するものと思われる。石器は3区で総数680点程、4区で800点程出土している。石器の製作技術を検討できる重要な資料である。

5区から3区の南側にかけて幅10~15mの自然河川SR02が存在する。中近世土器を出土する上層と、石器のみを出土する下層に分けられる。3区の北岸には土坑が2基あり、16世紀頃の羽釜がほぼ完形で2個体出土しており、中近世の祭祀を考えるのに興味深い。

6区は近世以降宅地として利用されていた所で、溝、柱穴、土坑等が多く検出された。これらの遺構は、概ね近現代に属するものと思われる。また整地土層からは18世紀後半~19世紀の陶磁器類が多く出土した。



第 38 図 遺構配置図





写真 102  
2区旧河道SR01  
(西より)



写真 103  
3区全景(北より)



写真 104  
6区全景(北より)

写真 105  
1 区不明遺構 SX  
01 (北東より)



写真 106  
3 区旧河道内土坑  
SK01 (北東より)



写真 107  
3 区旧河道 SR02  
土層断面 (東より)

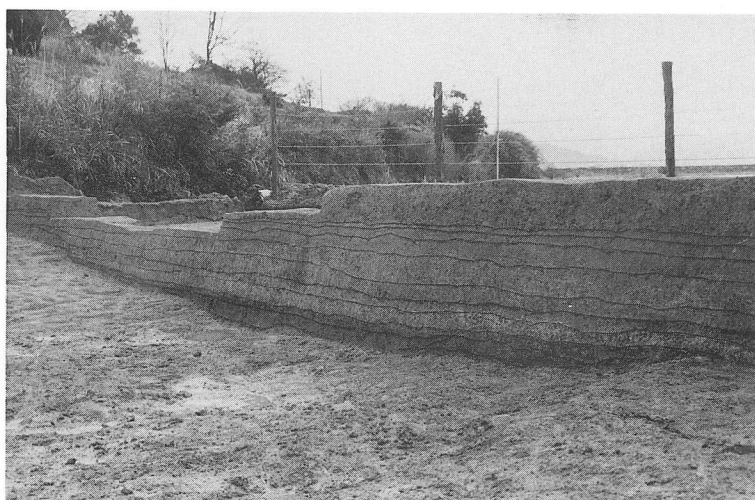




写真 108

3区擦石出土状態  
(北より)

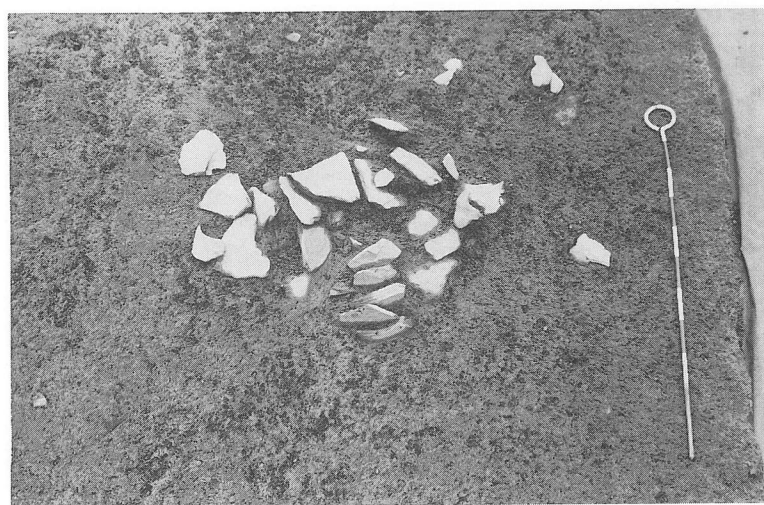


写真 109

4区サヌカイト  
剥片集積上面  
(北東より)

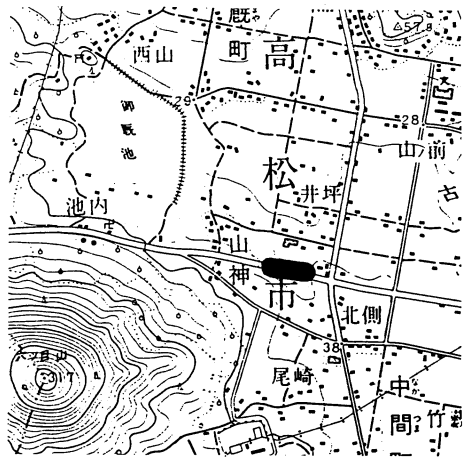


写真 110

4区サヌカイト  
剥片集積下面  
(東より)

### 13. 中間西井坪遺跡

高松市と国分寺町を隔てる堂山山塊は、北より伽藍山・六ツ目山・堂山と3つの山が連なり、その各々から派生する丘陵の谷部には、狭小な扇状地がいくつか形成されている。中間西井坪遺跡はこうした扇状地の一つ、六ツ目山東裾に広がる扇状地の扇端部に位置している。また本遺跡は、香東川・古川が北流する肥沃な高松平野が見渡せる日当たりの良い緩斜面地で、居住地として最適の環境を有している。にもかかわらず、現在まで周辺の丘陵上に古墳の分布がいくつか知られていたのみで、集落に関わる遺跡は把握されていなかった。こうしたことから今回の調査によって、弥生時代から近世に及ぶ集落跡が検出され、遺跡分布の空白を埋める結果となったことは重要であろう。以下、調査結果の概要について述べることにする。



第 39 図 遺跡周辺地形図

弥生時代後期の遺構としては、調査区中央から西半部で、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡数棟、自然河川1条(SR02)等が検出された。調査区東半部では遺構は希薄となることから、調査区西端で検出された自然河川を中心に、集落域は南北に長く広がる微高地上に営まれていたものと思われる。

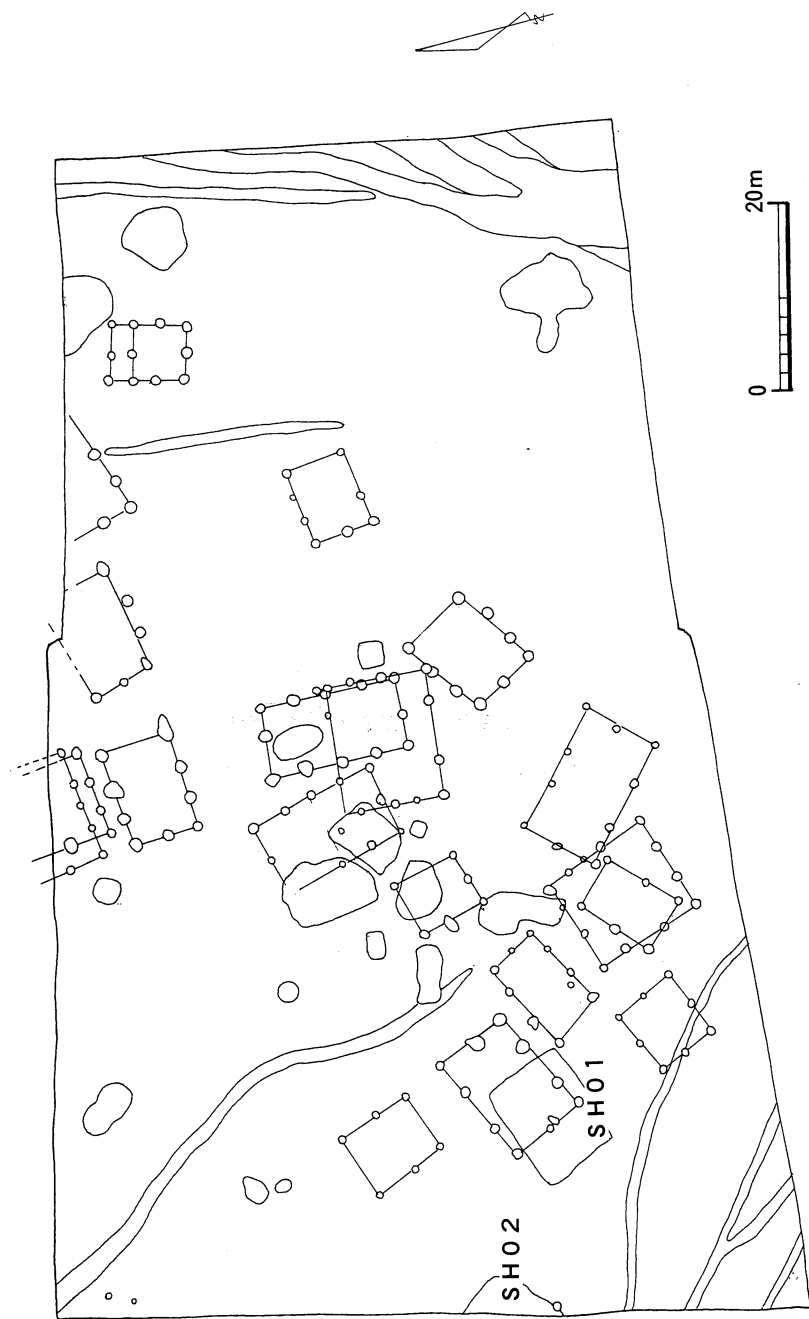
中世から近世の遺構は、調査区東半部を中心に、掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸、自然河川(SR01)等を検出した。

遺物としては、SR01より平安時代初頭頃と思われる人形・斎串?各1点が出土している。遺物の性格と、調査区南接地を旧南海道(推定)が東西に横切り、文献には中間郷の記載もみられることから、調査区周辺で官衛等の遺構の存在が予想される。

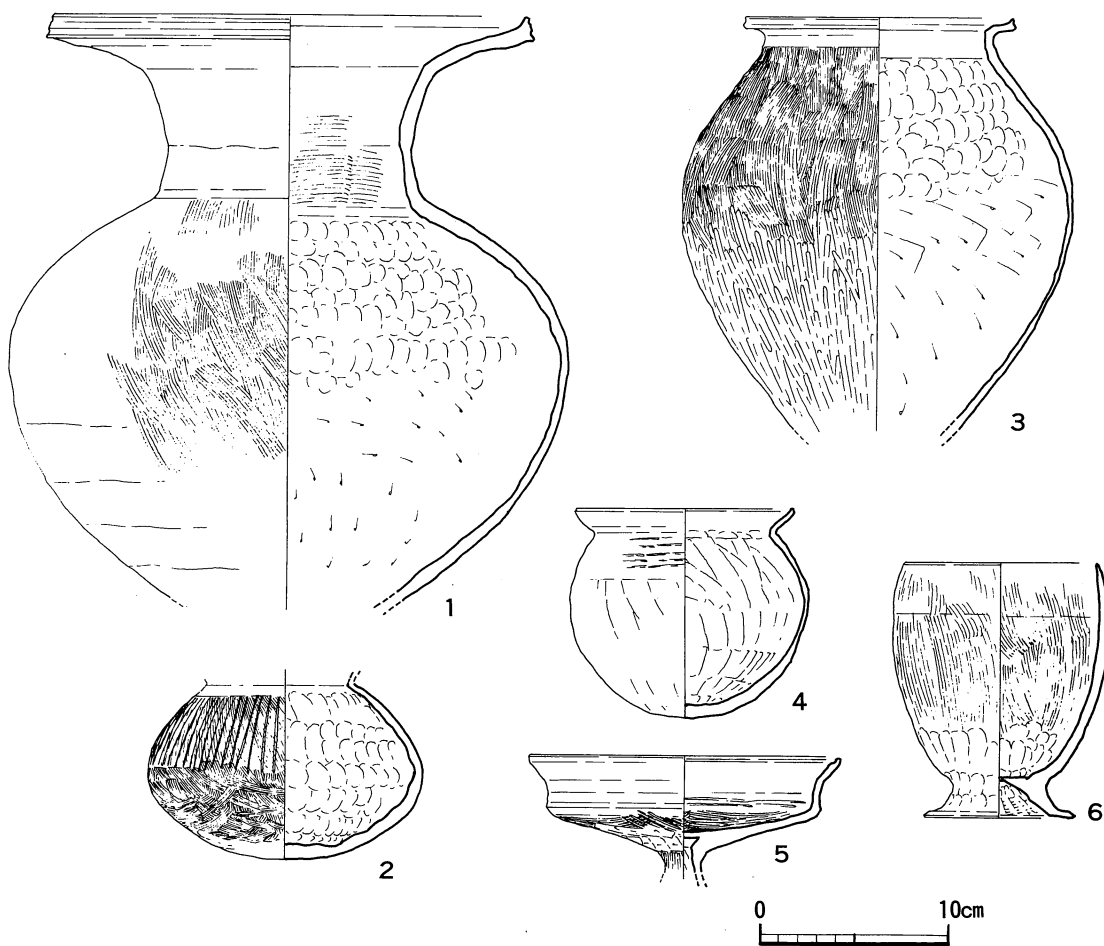
また、SR02の河底で、径約1mの円形の掘り形を持つ土坑が検出された。埋土より、鍬・杭柄等の木製品が拳大の礫と共に出土した。検出状況より考えて、奈良県唐古遺跡等で出土している木器貯蔵穴の可能性が考えられる。時期は、同時に出土した土器より、弥生時代後期終末頃と考えられる。

また、SR02の河底で、径約1mの円形の掘り形を持つ土坑が検出された。埋土より、鍬・杭柄等の木製品が拳大の礫と共に出土した。検出状況より考えて、奈良県唐古遺跡等で出土している木器貯蔵穴の可能性が考えられる。時期は、同時に出土した土器より、弥生時代後期終末頃と考えられる。

以上の様に、中間西井坪遺跡では、弥生時代後期以降、現在に至る人間の生活の痕跡が確認された。これは、生産域として東方に肥沃な高松平野を控え、その居住地としての遺跡周辺地域の環境の良さを如実に反映しているものと思われる。



第40图 南東隅調査区遺構配置略図



第 41 図 SR8902 出土遺物実測図

番号	遺構名	種別・器種	法量(cm)	胎土	色調	調整技法等
1	SR8901上層	弥生式土器・壺	(口) 24.8	やや粗 0.1~3.0mmの金雲母・角閃石粒含	濁黄褐色	外面 タテハケ 内面 ヘラケズリの後上半ユビオサエ
2	" 中層	" 壺	—	密 0.1~3.5mmの石英・赤色粒含	濁黄褐色	外面 タテハケの後放射状暗文 内面 ユビオサエ
3	" 下層	" 甕	(口) 14.1	密 0.1~2.0mmの石英・金雲母粒含	濁黄褐色	外面 タテハケの後下半ヘラミガキ 内面 ヘラケズリの後上半ユビオサエ
4	" 中層	" 甕	(口) 11.4 (高) 11.3	やや粗 0.1~6.0mmの石英粒含	黄褐色	外面 タタキメの後イタナデ 内面 イタナデ
5	" 下層	" 高坏	(口) 16.4	密 0.1~1.5mmの石英・金雲母粒含	茶褐色	外面 格子状ヘラミガキの後ヘラケズリ 内面 格子状ヘラミガキ
6	" 上層	" 鉢	(口) 10.1 (高) 13.7 (底) 8.0	密 0.1~2.5mmの石英粒含	茶褐色	外面 タテハケの後高台部ユビオサエ・ナデ 内面 タテハケの後底部付近ユビオサエ

第 4 表 出土遺物観察表



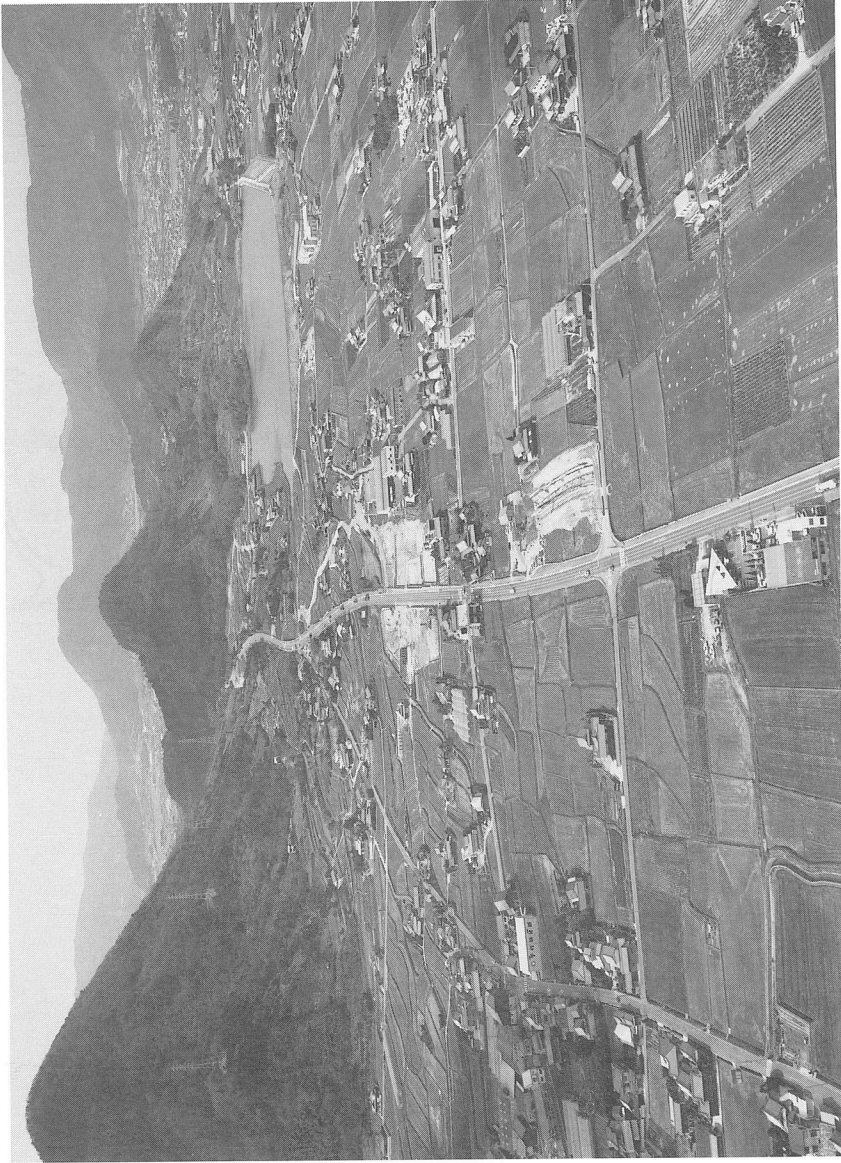


写真 111 遺跡遠景 (東から)  
中央の白い部分が調査区、背後は六ツ目山と伽藍山

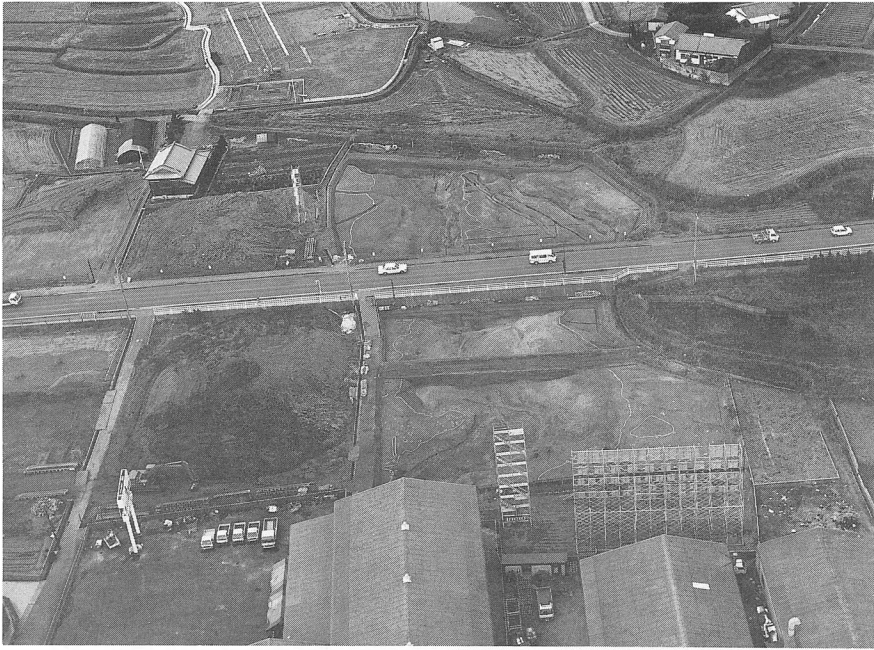


写真112 SR8901・8902 全景 (北から)



写真113 SR8901 人形出土状況 (東から)  
右手が頭 円底近くの粘土層より出土



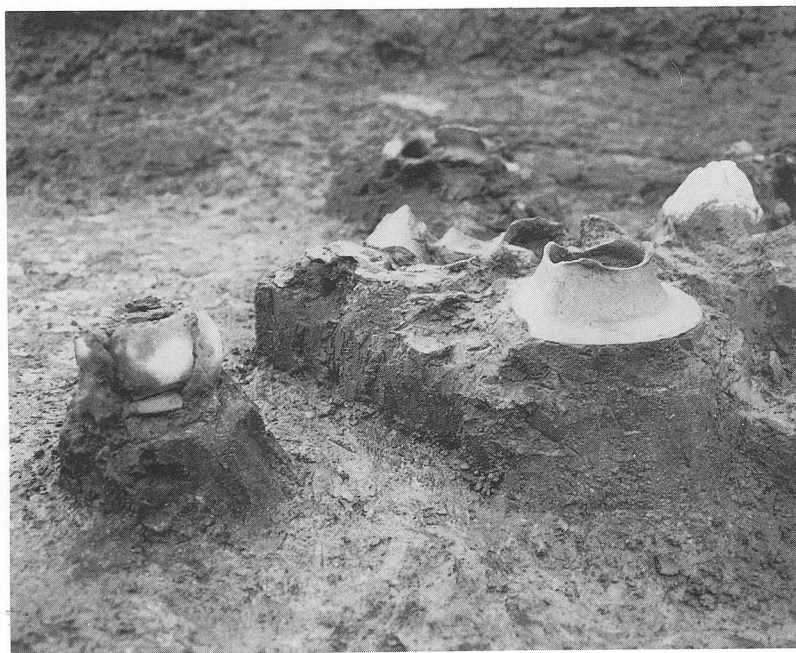


写真114 SR8902中層遺物出土状況(南から)



写真115 SR8902内木器貯蔵穴遺物出土状況(西から)



写真 116 掘立柱建物跡検出状況(西から)  
弥生時代後期の2×3間の建物跡

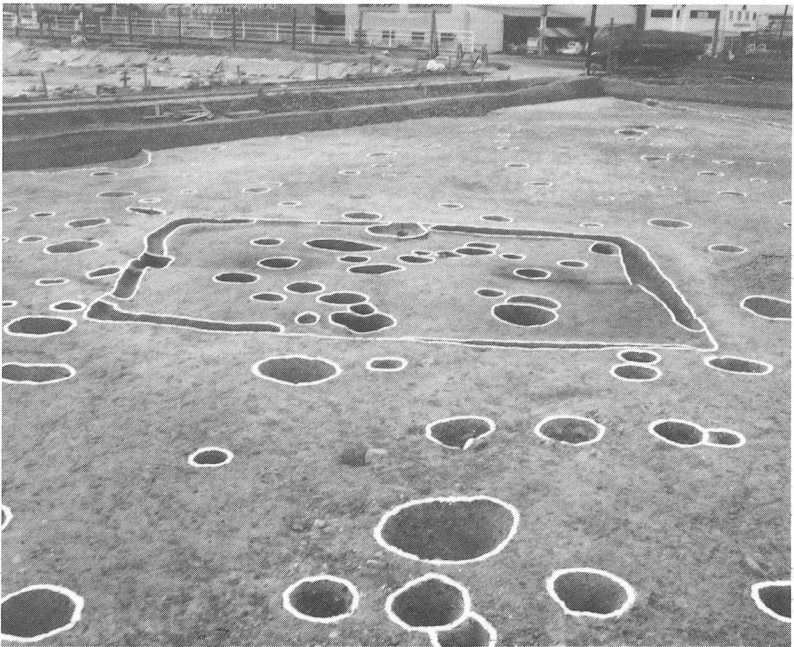


写真 117 竪穴住居跡検出状況(南から)  
北壁際に炉を有し、四周に壁溝を巡らせる

四国横断自動車道建設に伴う

**埋蔵文化財発掘調査概報**

平成元年度

平成2年8月31日

編集 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会  
(財) 香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団高松建設局

印刷 株式会社多田印刷所